紹　介

Hanno Beck
Große Geographen ; Pioniere, Außenseiter, Gelehrte

本書は、ヨーロッパ古代から現代にわたる十数名の主要な地理学者について述べたものである。著者ハンノ＝ベックは一九二三年ドイツの生まれで、一九五一年の“Moritz Wagner”を皮切りに、地理学史を中心として、本書刊行まで十四冊の著作をものしている。特にフンボルト研究の業績には、目覚ましいものがある。そのうち一九七一年に著した“Große Reisende, Entdecker und Erforscher unserer Welt”は、地理学史の一部門として旅行史を扱ったもので、マルコ＝ポーロ・コロンブス・ケンペル・フンボルト・リビングストン・ナンセン・アムンゼン・ヘディンなど、ヨーロッパの二十一人の「旅行家」がとりあげられている。そしてギリシャ古代から現代までの展開を叙述する中で、「発見旅行」から「研究旅行」への変化を明らかにしている。その一方この書に漏れた「旅行家」のうち、フォルスターやリヒトホーフェン等に関しては、後に純粋な地理学史の枠内で取り扱われねばならないと述べ、すでに本書『偉大なる地理学者たち』の構想を示唆している。すなわち『偉大なる地理学者たち』は、『偉大なる旅行家たち』と一対をなすものとして、十一年の歳月の後に著わされたのである。

次に本書の構成を示すことにしたい。全体は十五の章に分かれ、原則としてそれぞれに一人の地理学者があてられている。各章のタイトルである地理学者名のあとには、簡単な副題がつけられているが、いずれも各人に対する著者ベックの評価が端的に表現されており、本書の概要を知るうえで便利である。そこでいささか味気なくはなるが、次にそれらを列記しておくことにする。ヘロドトス（ヨーロッパ地理学の父）、バルテル＝シュタイン（古典的地誌の作者・初期の大学地理学者）、三つの地理学（地理学者の三様）（地理学者としてはミュンスター・ケッカーマン・ヴァレニウスがあげられている）、ゲオルク＝フォルスター（地理学者・世界一周者・革命家）、フンボルト（近代史上最大の地理学者）、リッター（地理学の天才）、エリゼ＝ルクリュ（革命家・アナーキスト・フランス最大の地理学者）、リヒトホーフェン（模範的中国研究者・当時最も定評のあった地理学者）、ラッツェル（人類地理学の提唱者）、ブラーシュ（最も影響力の大きいフランス地理学者）、ペンク（地理学者・画期的な氷河時代研究者・地形学者）、ヘットナー（影響力の大きい方法論者）、マッキンダー（最も影響力の大きい近代世界像の創作者）、ラウテンザッハ（地誌学の大家）、トロール（フンボルト精神の一地理学者）。シュリューターの落ちているのが少し意外な気もするが、彼はヘットナーの章中で扱われている。また一見して分かる通り、ドイツ地理学者中心となっている。

ベックはこのように個々の地理学者について記述するだけでなく、全体を通じて地理学の三つの大きなパラダイム変換をも提示している（彼の言うパラダイム変換は、クーンの言うような革命的変化ではなく、非常にゆっくりと生じる変化に用いられている）。すなわち第一に常に部分的にしかすぎない環境決定論（Geodeterminismus）

から人間によって決定される地理学へのゆっくりとした変化、第二に神の創造した世界を洞察するものとしての地理学から世俗化した地理学への変化、第三にフンボルトによって作られた「地理学者・研究旅行家パラダイム」が現在終末を迎えたことである。十数人の地理学者たちは、これらの非常に大きな視点によって、ルースながらもひとつの地理学史にまとめあげられ、ただの寄せ集めになることを免れている。しかも各地理学者の記述は三つの視点にしばられることがなく、それぞれの論点を持っている。地理学の全時代的な流れと、地理学者個々の展開とが、巧みに組み合わされている。

ひとつひとつの論点については、例えばフランス地理学において（フランスについて論じるのは珍しい）、ブラーシュよりもエリゼ＝ルクリュを評価するなど興味深い点が多いのだが、一々言及する余裕がない。ただ一点のみ、ベックが地理学史の観点から、現在のヨーロッパ地理学の状況をどうとらえているかについて紹介しておきたい。ベックは本書の最後をラウテンザッハとトロールで締めくくっているが、この二人の死（一九七一年・一九七五年）によって、上述したフンボルト以来の「地理学者・研究旅行家パラダイム」が終わりを告げたと述べる。そしてドイツにおいても人文地理学（Kulturgeographie）の時代・計量的試みと実験の時代が始まったとしている。これは全く人間によって決定される地理学の時代であるともいう。数多くの旅行家たち・地理学者たちを扱ってきたベックの言には味わうべきものがある。

最後にベックの研究が常にヨーロッパに限定されていることを付記しておこう。彼の研究の背景には、シュミットヘンナーに基づく文化圏の考え方があり、個々の入り乱れを避けるため、地理学史研究をヨーロッパ文化圏に限っているものと考えられる。だがヨーロッパに閉じこもってしまうのはやはり惜しまれる。

しかしながら本書は長い目でヨーロッパの地理学史をよくまとめており、今後の地理学史研究のうえで見逃すことのできない貴重な成果であると言うことができよう。

（二九四頁　一九八二年　Berlin: Dietrich Reimer Verlag）

（小田匡保　京都大学大学院生）

M. J. Webber Explanation; Prediction and Planning
——the Lowry Model——

カナダの McMaster 大学教授である著者は、情報理論をとりこむことによって都市の空間構造を、より精密に記述し理解するということに努めてきた地理学者の一人である。著者はハミルトン市を事例として、都市の空間構造に関する操作的モデルを構築することを試み、それは前著である『情報理論と都市の空間構造』（一九七九、Croom Helm, London）にまとめられた。本書は著者のそうした一つの関心を反映したものであり、一応前著の内容の延長線上に位置する著作であるとみなすことができる。本書では、とくに Lowry モデルという操作的な都市モデルを議論の中心に置いて、地理学と都市計画においてそれがどのように用いられるかについて考察する。

本書の構成については、以下に述べる三つの問題に答えていくという形で展開される。① Lowry モデルとはどのようなものであり、どのように発展し、使用されてき